

ハインリヒ・ハイネの 『ルートヴィヒ・マルクス回想記』について

高 池 久 隆

岡山理科大学教養部

(1993年9月30日 受理)

I

1843年7月15日の午後6時頃、パリで一人のユダヤ系ドイツ人学者が息を引き取った。その名はルートヴィヒ・マルクス (Ludwig Marcus)。ドイツの一般的な百科事典にも名を残さないこの人物を追悼する文章が、翌年の5月2日、3日付の『アウクスブルク一般新聞』 (*Augsburger Allgemeine Zeitung*) に掲載された。匿名で発表されたこの文章の執筆者はハインリヒ・ハイネ (Heinrich Heine) である。そこでは、単にマルクスのことのみならず、ハイネ自身若き日に会員であったユダヤ人文化・学術協会 (Verein für Cultur und Wissenschaft der Juden) のこと、そしてユダヤ人解放のことなどが扱われている。私信はともかくとして、公になった文章でハイネが当協会について述べること、またユダヤの問題についてこのように纏まった形で言及することは稀であり、その意味でこの作品は大いに注目に値するものと言わなければならない。本稿の目的は、本作品におけるハイネの発言を跡付けることにより、そこから浮かび上がってくるハイネとユダヤの問題との関わりを明らかにすることにある¹⁾。

さて、本論にはいる前に確認しておかねばならないのはテキストの問題である。この作品も、ハイネの多くの作品同様、必ずしも著者の当初の意図どおりの形で公にされたわけではなかった。『一般新聞』で発表されたものは、検閲に抵触しないことをひたすら望む編集者の意向を顧慮したハイネが、過激な箇所を削り、短くしたものなのである。10年後の1854年、ハイネはこの文章に54年の時点での『後日の覚書』 (*Spätere Note*) を添え、自らの『雑録集』 (*Vermischte Schriften*) に収めて発表することにするが、その際『一般新聞』における形ではなく、当初意図した形に戻すつもりでいた。ハイネが、手元に保管していた未発表部分を出版社に送り「復元」しようとしたにもかかわらず、出版社の側でその作業が忠実に行なわれぬまま刊行されてしまう。この版もまたハイネ自身の意図に完全に合致するものではなかった。従って、この作品についての文献学的に異論の無い版は存在せず、「決定版テキストの編集はまだ未決着」²⁾ の状態が続いた。この問題を解決に導いてくれることが期待されていた³⁾ デュッセルドルフ版の当該巻が1991年に刊行されたが、「異論のない」ものとなっているか否かは、にわかには判断しがたいのが現状である。

II

そもそもマルクスとはどのような人物なのであろうか。そしてハイネとマルクスはどのような関係にあるのであろうか。ハイネ自身の記述には必ずしも正確でない部分があるので、ここでは Michel Espagne⁴⁾ の記述で補強・修正を行ないつつ辿ってみよう。

ルートヴィヒ・マルクスは1798年10月31日、7人兄弟の4番目としてデッサウ (Dessau) に生まれる。小売商の父は、教義を厳格に守るユダヤ人であった。経済的に恵まれているとは言えず、学業を続けるについては、様々な人々の援助を仰がねばならなかった。1818年10月ベルリンへ行ったマルクスは、本来の希望と異なるが、ユダヤ人である彼により恵まれた将来を約束してくれるであろう医学の勉強を始める。ところが、医学の勉強も残りわずかという段階の1822年1月になって、哲学 (文学) 部に転じる。ハイネがマルクスに初めて会うのもこの頃である。「そこベルリンで私は初めて彼に会った。しかもヘーゲルの講義においてであった。マルクスとはよく隣り合わせに坐ったが、先生の言葉をきっちりノートしていたものだ。」(XV, 265) そして「8歳の少年並みの小さく華奢な肉体」(XV, 265) と顔にみられる「老人の風」(XV, 265) の奇妙なコントラストが外見上の特徴であった。1825年マルクスは、ライプツィヒを經由してパリに移住してしまう。それゆえ、ハイネとマルクスの接触は一旦ここで途絶える。二人が偶然再会するのは1842年パリでのことである。

そんなある日、あの小男がここパリで再び私の方に歩み寄ってきた。そして、会わないでいた間にディジョン (Dijon) で教授をしていたが、今は政府側の不当な仕打ちのためその教授職を捨ててしまっており、図書館の資料を大作執筆に利用するため、ここにずっといるつもりである、と話してくれた。(XV, 271)

病気と貧困に苦しむマルクスに手を差しのべたロートシルト夫人 (Betty Rothschild) の助力もあり、晩年の生活環境は必ずしも劣悪なものではなかったようだが、死の直前には精神の病を患うことになり、1843年7月に人生の幕を閉じたのであった。

それでは、ハイネはこの人物をどのように評価していたのか。一方でハイネは、マルクスが同じ町出身のモーゼス・メンデルスゾーン (Moses Mendelssohn) に容貌が似ているのみならず、精神においても「ドイツ系ユダヤ人達のかの偉大な改革者のごくごく近親のもの」(XV, 266) であり、それは「この上なく大きな無私の心、耐え忍ぶ秘めたる勇氣、慎ましい正義の感覚、悪しきものに向ける軽蔑の微笑、そして抑圧を受けている信仰仲間への不屈の、鉄のように変わらぬ愛」(XV, 266) に示されているとして高く評価する。その一方で、ベルリンの学生時代から博学の人であったマルクスの知識のあり方に対しては次のような手厳しい評価を与える。

マルクスは自分の知っているもの全てを、生き生きとした有機的な形ではなく、死んだ歴史性として知っているにすぎなかった。自然の全てが化石となった。

結局のところ、彼が見知っているのは化石とミイラのみであった。(XV, 266)

また、「芸術的形成能力の無さ」(XV, 266) から来る文章の読み難さ⁵⁾をも指摘している。

III

ハイネとマルクスは、単なる学友というにはとどまらない。両者の関係はある団体の存在抜きには語れないのである。すなわち、二人ともに「ユダヤ人文化・学術協会」のメンバーであった。この会は、頻発する反ユダヤ主義暴動などに対処するためユダヤ民族内部の改革運動の一つとして設立されたものである。目指すのは、ヨーロッパ社会への同化であり、(1)「学術研究所」の創設、(2) 定期刊行物の発行、(3)「学校」の開設、(4)「通信のための資料館」の設置、が計画された⁶⁾。マルクスは、1821年11月17日に17番目の会員として、ハイネは1822年8月4日に23番目の会員として同会に入会する⁷⁾。ハイネ自身、協会内の「学校」で、歴史、ドイツ語、フランス語の授業を担当したり、「学術研究所」の副書記として議事録の作成を引き受けるなど、相当に積極的な活動を行っていたようである。しかし、「天翔ける如く遠大であるが、実現不可能な理念」(XV, 267)を追求するこの会は、1824年に実質的な活動停止状態となり、25年には形の上からも消滅してしまう。

ハイネは、1825年にプロテスタントへの改宗を行い、自身「ヨーロッパ文化への入場券」⁸⁾と呼んだ受洗証明書を手に入れていたこともあってか、その後この協会との関係を公に語ることはなかった。同じく協会員であったマルクスの死をきっかけに、この「回想」で当時を振り返り、同会について評価を加えることになったのである。

その際、ハイネが総体としてのこの会に言及することは余り多くない。というのも、この会自体、「相当にまちまちな個性の結合」⁹⁾であるため一括して語る事が困難なことも大きな原因であろう。それゆえ、ハイネの回想も同会の主要メンバーひとりひとりの個性に焦点を当てるものである。以下順に辿ってみよう。

第一番目に挙げられるのは、ツンツ (Leopold Zunz) である。「言葉と行動の男、彼は他の者達が夢想し、意気消沈してくずおれているところで、働き、活動していたのである」(XV, 268)と最大級の賛辞を贈られたツンツの業績は、ユダヤ学の基礎づくりを行なったことにある。この作品の別の箇所では、「かの協会の秘めたる目的」(XV, 270)は「歴史的ユダヤ教と、いずれ世界を制覇するに至るであろうと思われる近代の学問を仲介すること」(XV, 270)であったとハイネが指摘するとき、この短命に終わった協会の歴史的意義、すなわちユダヤ学の基礎を築くことにおいて果たした大きな役割のことを指しているのだが、このユダヤ学と密接不可分の名前がまさにツンツなのである。ツンツは、この協会創設の前から、そして解散後も、この方面の仕事が続けたのであった。

ツンツに比べれば、ベンダーフィット (Lazarus Bendavid) の扱いにはイローニッシュなものを感じられる。「精神及び強い性格を素晴らしく洗練された教養と調和させていた」(XV,

268)と評価される反面、「カント哲学のもっとも熱烈な信奉者」(XIV, 268)でありながら、一方でユダヤ教信者の仲間から離れようとしないうという矛盾が指摘される。

続いて登場するのは、「協会の最も活動的な会員、協会の本来の中心人物」(XIV, 268)と評されるモーザー (Moses Moser) である。この、ハイネにとって友人と呼びうる人物は、「人知れず戦い、血を流したのであり、その名は全く知られぬままにとどまった」(XIV, 268)のであった。

以上のメンバーについては時に皮肉が混じることはあっても、基本的には肯定的な評価がなされているように見えるのに反して、協会の会長であったガンズ (Eduard Gans) について語るときのハイネの舌鋒は余りにも鋭すぎるように思える。無論一方でガンズが才能豊かであることは否定しない。「ドイツの学問についての故ガンズの功績はあまねく知られている。この人物は、ヘーゲル哲学の最も活動的な唱道者の一人であり、法律に通じていた彼は古代ローマ法の下僕どもと闘い、粉碎したのである。」(XIV, 269)しかし、他の会員に見られたような「謙虚な自己犠牲」, 「匿名の殉教」(XIV, 269)などが彼には無縁であることを指摘する。ハイネが特に力を込めて批判するのは、ガンズがユダヤ人文化・学術協会に対し「最も許されざる背信」(XIV, 269)を犯した点である。

アシテーターの役割を果たし、会長としての一定の義務を引き受けていただけに、彼の離反はなお一層嫌悪の念を引き起こした。船が難破したとき、船長たる者は常に一番最後に船を去る、これが古くから伝わる義務である。——ところがガンズはまず我が身を救ったのである。(XIV, 269)

これだけでは、具体的に何を意味しているのか判りにくいだが、ガンズのキリスト教への改宗を指している。協会は確かにユダヤ人のヨーロッパ社会への同化を目指すものではあったが、決して改宗による同化を想定しているわけではなかった。しかし、自分の望むベルリン大学法学部教授の地位に就くことが、ユダヤ教徒のままでは困難であることを痛感したガンズは、キリスト教への改宗を決心し、1825年12月12日実行に移す。それ以前から事実上挫折していた協会は、会長の改宗という事態に至って、明確に終止符を打たれることになる。ハイネが「背信」と呼ぶのはまさにこのことなのである。この改宗については、1825年のある詩の中で次のように扱われている。

おお、神聖な青年の勇気よ！
 おお、それがなんと早く馴らされてしまったことか！
 それで君はすっかり熱がさめ
 神様達と和解してしまった

 そして君は十字架のもとに這いつくばった
 君が軽蔑していたあの十字架
 つい数週間前までは

踏みにじろうと思っていたあの十字架のもとにだ！ (I, 529)

しかし、このようなハイネの批判は、ハイネ自身がガンスに先立つこと約半年前、すでにプロテスタントに改宗していることを知る私たちにとって不可解なものである。ハイネは、1825年6月28日、ハイリゲンシュタットの教会で洗礼を受け、名前もハリー (Harry) からハインリヒ (Heinrich) に改めている。勿論これも、改宗によって公職に就く道が開かれることを期待してのことであった。ガンスとの違いを言えば、ガンスが所期の目的(教授就任)を果たしたのに対し、ハイネの場合、結局弁護士になる希望も叶わなかったことであろう。そしてまた、二人の協会内での地位の違いは大きかったといえるだろう。しかし、だからといって、ハイネが自らの行為については免責にし、ガンスの行為のみを非難していると把えるのは妥当ではない。このガンスの行為はある程度まで自分自身の行為でもある。従って、ここでガンスが批判されているとすれば、ハイネの意識の中では、自分自身が批判されてもいるのである¹⁰⁾。

その際注目されねばならないのは、ガンスの豊かな才能と改宗という行動を関連づけるのに、「天才的資質」(Genialität, XV, 269)と「美德」(Tugend, XV, 269)の対立を持ち出していることである。これは、ハイネが他の箇所ではしばしば使う表現で言えば、「才能」(Talent)と「性格」(Charakter)ということになるであろう。例えば、『アッタ・トロル』(Atta Troll. Ein Sommernachtstraum)の序文(1846年)では次のように言われている。

才能は当時たいそう不都合な天分でした。というのも、才能は無節操という疑いを受けたからです。嫉妬深い無能力者は、何千年の間あれこれ思案した後、とうとう天才の高慢に対する大きな武器を発見しました。すなわち彼らは、才能と性格というアンチテーゼを発見したのです。(IV, 10)

この図式はもともとルートヴィヒ・ベルネ (Ludwig Börne) がハイネを批判するときに用い、その後も、再三再四ベルネ及びその周辺の人々からハイネ批判の際持ち出されたものである。この点から判断すれば、この作品でのガンス像にハイネが自らの姿を相当に投影しているであろうこと、と同時に、ガンス像が一見そう見えるほどには否定的な存在として扱われているわけではないことが推測されるのである。

IV

ハイネの筆は単に、20年以上前の、ユダヤ人文化・学術協会時代の思い出を記すことのみにとどまるのではない。そもそも、1844年頃という時期は、1843年ブルーノ・パウアー (Bruno Bauer) の『ユダヤ人問題』(Die Judenfrage), 1844年カール・マルクス (Karl Marx) の『ユダヤ人問題に寄せて』(Zur Judenfrage) 発表に見られるように、ユダヤ人解放が重大な問題として意識されていた。この回想記では1844年の段階での、この問題に対するハイネの見解が示される。

まず初めに、ユダヤ人憎悪が宗教的問題から社会的・経済的問題へとその性格を変えていることを次のように指摘する。

ユダヤ人に対する反感は上層階級においてもはや宗教的な根を持っていない。そして下層階級においてそれは、勢いよく成長を続ける資本の力に対する、富める者による貧しい者の搾取に対する社会的怨恨へと日毎どんどん形を変えていく。(XIV, 270)

さらに、ユダヤ人問題と国家の関係を次のような比喩によって表現する。「国家とは有機的なからだ」(XIV, 270)であり、「そのからだは、四肢のうちのただ一つでも、たとえそれが足の小指一本であろうとも、疾患にかかっている限り、完全な健康状態には到達し得ない」(XIV, 270)のであり、「ユダヤ人に課せられたさまざまな制約はドイツ国家の足にできたそのような魚の目なのである」(XIV, 271)と。

「解放は早晚認められなければならないだろう。正義感からして、賢明さからして、必然性からして」(XIV, 270)に見られるとおり、1844年の時点のハイネは、ユダヤ人解放の行方について、かなり楽観的であったように見受けられる。フランス革命、とりわけナポレオンの力によってユダヤ人に対する制約が大幅に緩和されたことを身をもって体験しているハイネは、来たるべき革命にともなってユダヤ人解放が大幅に進むことを期待していたものと思われる。

その意味で、1844年と、『後日の覚書』が書かれた1854年間の10年間の隔たりは大きい。この間の1848年に二(三)月革命が勃発したが、それは不幸な結果に終わる。ユダヤ人解放という観点からみて種々の後退がみられる1854年においては、以前の楽観性は消え、「キリスト教徒の解放も完全に勝ちとられ、保障されて初めて、ユダヤ人は真に解放されうる」(XIV, 274)ことを認識する。

ユダヤ人問題についてハイネは、冷静な現状分析のみならず、相当に大胆な見解をも提示する。

しかし、1500年前からドイツに定住しているユダヤ人とキリスト教のドイツ人の間に実際それほど大きな民族的相違があるのであろうか。絶対に否である。奇妙なことに、最古の時代において既に、ユダヤ人とゲルマン人の間にはこの上なく大きな親和力が支配していた。そして隣の国々と比較してみると、私にはユダヤが常に一種のドイツ、ほとんど東洋のマルク＝ブランテンブルクと云いたいぐらいのものに見えたのである¹¹⁾。

ユダヤ人という異質なものととの融合によって純粋なドイツ性が汚されるのではないかという、ユダヤ人解放の大きな障害となりうる観念に対し、ユダヤ人とゲルマン人が決して遠い存在ではないことを強調する。この、客観的妥当性に少なからぬ疑問の残る見解は『告白』(Geständnisse)などにおいても展開されており、ハイネの切実なる心情を色濃く反映

している。

この回想記は結局、1820年代初頭、1844年、そして1854年と、三つの時点でのハイネのユダヤの問題との関わりを包括するものになっていると言えるであろう。

V

以上、マルクス回想を導きの糸として始められた、ユダヤ人文化・学術協会にまつわる回想、ユダヤ人問題一般についての論議を観てきた。これら二つの問題の存在が大きいだけに、ややもすると、この作品におけるマルクス自身の役割が、これらの問題に目を向けるための単なるきっかけにすぎないかのような印象を与えかねない。しかし、先に、ハイネがガンス像に自らの像を投影していることを述べたが、そのことは、このマルクス像についても言える。しかも、より大きな程度においてそうなのである。

さまざまな点で正反対とも言えるハイネとマルクスであるが、ともにユダヤ人としてドイツに生を享け、ドイツでの将来に失望し、フランスへ渡り、その地でさまざまな苦勞を体験しつつ生きている。この点で二人は同じ境遇にあったのである。ハイネはこの作品で、マルクス回想記という性格上、自らのことについてはほとんど触れないが、マルクスについて語るとき、それは他人の身の上を単に客観的に語るといったものではなく、半ば自らを語っているとも言えるであろう。

とりわけ、死の直前マルクスが精神の病に見舞われたことは、ハイネ自身幸いそれを免れているとはいえ、他人事とは感じられなかったことであろう。

フランスへやって来たドイツ人のうち、かくも多くの人々が狂気に陥ってしまう理由は何であろうか。(……)思うに私たちは病患の芽をともなってラインの河を渡るのであろう。(……)そもそも祖国を去り、異国の地で「堅い階段」を昇り降りし、それにもまして堅い流瀆のパンを涙で濡らすなどということ自体が既に、かなり狂ってしまっていることの証拠なのであろうか。(……)この不幸に見舞われたのはいつも主として、最も尊敬すべき人々、最も勤勉で節制した人々なのである。(XV, 265)

この、回想冒頭にある、在仏ドイツ人と発狂を関連づける文章を読めば、決してこれがハイネと無縁のことではないことが理解されるであろう。そしてその延長線上にあるのが、1854年の『後日の覚書』にある、旧約聖書のヨブ記を連想させる問い、「なにゆえ、正しき者が地上でかくもひどく苦しまねばならないのか」(XV, 274)である。「正しき者」とは、直接には、マルクスの遺稿編集に当たり、失明してしまったオリエント学者ムンク(Salomon Munk)を、そして発狂し亡くなったマルクスを指すのであろうが、さらには、脊椎を病み「褥の墓穴」生活を送る晩年のハイネ自身のことが当然念頭にあったはずである。

1840年、同じくユダヤ人であり、ハイネよりも早くパリに亡命して文筆活動を続けてきた故ベルネの回想録を発表し、その中でベルネとその周辺の人々を批判的に描くことで、

その時代を活写しようとしたハイネは、今度は、同じくルートヴィヒという名を持つマルクスとその周辺の人々を概ね好意的に描くことによって、ユダヤの問題と自らの関わりを明らかにするとともに、「流謫」の暮らしの孤独と悲惨を訴えるのである。

テキスト

ハイネの著作の底本としては原則として下記のものを用い、引用の際は本文中にその巻数とページ数を（XIV, 270）のように付記した。

Heinrich Heine : *Sämtliche Werke*. Düsseldorf Ausgabe. Hrsg. von
Manfred Windfuhr. Hamburg 1973 ff.

註

- 1) 本稿では、内容面に焦点を当てることにするが、ハイネは手紙の中でこの作品の文体 (Stil) の面の成功を自負している。「この回想記をお読みになる場合、その前に奥さんにクッションを持ってきてもらって、ひざまずいてこの作品をお読みください。と言うのも、あなただっただけこんなに優れた文体を拝む機会はそうそうないでしょうから。」(1854年3月19日付ユーリウス・カンペ(Julius Campe)宛) Heinrich Heine : *Werke, Briefwechsel, Lebenszeugnisse*. Säkularausgabe. Hrsg. von den Nationalen Forschungs- und Gedenkstätten der klassischen deutschen Literatur in Weimar und dem Centre National de la Recherche Scientifique in Paris. Berlin und Paris 1970 ff. (以下では HSA と略記) Bd. 23, S. 312.
- 2) Gerhard Höhn : *Heine-Handbuch. Zeit, Person, Werk*. Stuttgart 1987. S. 367.
- 3) Vgl. Jeffrey L. Sammons : *Heinrich Heine*. Stuttgart 1991. S. 132.
- 4) Vgl. Michel Espagne : *Der König von Abyssinien. Leben und Werk des » kleinen Marcus «*. In : *Heine-Jahrbuch 25*. Hamburg 1986. S. 112-138.
- 5) マルクス達の文章の難解さについては手紙のなかでも指摘している。Vgl. HSA Bd. 20, S. 102f.
- 6) ハルトムート・キルヒャー(小川真一訳)『ハイネとユダヤ主義』, みすず書房, 1982年, 47ページ参照。
- 7) Vgl. Espagne : a. a. O., S. 115.
- 8) Heinrich Heine : *Sämtliche Werke*. Hrsg. von Ernst Elster. Leipzig 1887-1890. Bd. 7, S. 407.
- 9) Espagne : a. a. O., S. 115.
- 10) 木庭 宏『ハイネとユダヤの問題』, 松籟社, 1981年, 141ページ参照。
- 11) Heinrich Heine : *Werke und Briefe*. Hrsg. von Hans Kaufmann. Berlin und Weimar 1961-1964. Bd. 7, S. 294.

Über Heinrich Heines *Ludwig Marcus. Denkworte*

Hisataka TAKAIKE

Faculty of Liberal Arts and Science,

Okayama University of Science

Ridai-cho 1-1, Okayama 700, Japan

(Received September 30, 1993)

Der Nekrolog besteht aus drei aufeinander bezogenen Themen. Erstens blickt Heine auf die Freundschaft zwischen Heine selbst und Marcus zurück. Zweitens bespricht er einzelne Mitglieder des „Vereins für Cultur und Wissenschaft der Juden“, zu dem Heine und auch Marcus in ihrer Jugend gehörten. Drittens äußert er sich über die gegenwärtige Situation der Judenfrage und die Möglichkeit der Judenemanzipation. Der Dichter, der nach der eigenen Taufe über solche Probleme Schweigen bewahrt hatte, begann jetzt hier seinen Mund groß aufzumachen. Der vorliegende Aufsatz beabsichtigt, Heines Worte über Marcus, den Verein und die Judenfrage zu analysieren und dadurch seine Einstellung zum Judentum zu verdeutlichen.